

埼玉大学教養学部同窓会だより

けやき会

第14号

教養学部50周年

けやき会会長 榊木誠

(70年卒中国文化)



けやき会は1991年の創立以来、4半世紀の歴史を刻んできました。この間、卒業後官民の各分野で活躍する約9000人の同窓生のネットワークを強化するため、年1回の同窓会総会

の開催や会報発行、ホームページでの様々な情報発信、各専攻や各期などのミニ同窓会への支援、などの活動を進めてきました。

卒業生と在学生の結びつきを強めるために、教養学部とも協力して、教育支援金の寄贈などを通じた研究・就職支援にも積極的に取り組んできました。国立大学予算の経年的な削減、人文・社会系学部見直し論など、大学と学部を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。逆風が強まる中で、よりよい研究・教育環境を守る上で、同窓会が果たす役割はますます大きく

なっています。

2013年度からは教養学部のご協力を得て、卒業生と在学生を結ぶ学びの場として、教養学部の講義の中に、けやき会の寄附講座「経済事情——グローバル時代のキャリア形成」(2単位取得)の授業を開講しています。寄附講座は3年目を迎え、教養学部生だけでなく、経済・教育学部生も加え受講生が100名を超えるまでになっています。

授業では、国内外で幅広く活躍する同窓生の方々に、グローバル化最前線で蓄積した貴重な経験と見識を在学生たちに還元していただいています。教養学部は現在、「グローバル人材育成推進事業」に積極的に取り組んでいます。けやき会としても寄附講座などを通じて、広く世界で活躍する次世代の育成に今後とも積極的に貢献していきたい、と考えております。

2014年度には、望望の教養学部同窓会(けやき会)の「けやき会名簿(第3版)」を発行いたしました。今後ともこの名簿が、新会員の方々を含めた同窓生の皆様のネットワークの礎に

なると共に、新たな感動や懐旧の情などを提供することにより、けやき会がますます盛んになることを願っています。

旧文理学部の改組によって創設された教養学部は2015年度に50周年を迎えました。新設当時、東京大学や国際基督教大学など全国でも極めて希少な存在として産声を上げた教養学部は、リベラルアーツを深く広く学べる教育・研究環境をはぐくむ中で、社会の幅広い分野で活躍する有為な人材を輩出してきました。

半世紀の歩みの中で、教養学部が社会的な声望を高めて来ることができたのは、学部の教職員の方々の尽力と同窓生の皆さまの努力の賜物と深く感謝いたします。社会的価値観が多様化し、物事の本質を真摯に探究するリベラルアーツの重要性が一段高まる中で、今後とも学部とご協力して、学びの場としての教養学部の環境づくりに一層尽力していききたいと思っております。

けやき会は、「時代と社会の荒波の中で活躍する同窓生に、心の潤いと楽しみ、励みを与える場」であると共に、専攻別や学年別など同窓生同士の交流の輪を有

機能的に結合する組織としての活動をさらに強化し、深化させていきたいと思っております。けやき会の人の輪、活動の波をさらに強固に広げていくために、皆様のさらなるご協力をお願い申し上げます。

教養学部長あいさつ

市橋秀夫



2016年4月より教養学部長に就任いたします市橋です。同窓会のみならずには、さまざまな温かいご支援をいただき、心よりお礼申し上げます。

教養学部は過去4年間、高木前学部長がイニシアチブをとって文科省から獲得したグローバル人材育成事業の補助金を資源にして、教育の質の向上に取り組んでまいりました。グローバル人材の育成という「海

2016年度けやき会総会・講演会のお知らせ

日時 6月25日(土) 1時半 場所 埼玉県立近代美術館

講演 小谷竜介(教養26期) 東北歴史博物館副主任研究員

演題 「東日本大震災で被災した文化遺産を再生する」

1時半より市民公開

懇親会 午後4時〜午後6時 会費 5000円(当日受付)

外への留学生数を増やすこと」かと思われがちです。しかし、私たちの主眼は非留学組も含めた学生全員が埼玉で受ける教育の質を一段高いところへ引き上げることにありました。それは大小さまざまな制度改革として実を結んでおり、教養学部学生はもとより、他学部学生や全学教育にも大きなプラスをもたらしています。

人文社会系の研究および大学院教育の強化という点でも、昨年度は大きな改革が全学主導で行なわれました。わが文化科学研究科は経済学研究科と合併し、人文社会科学研究科となりました。いわゆる「大学院重点化」と呼ばれている改革です。博士前期の教育課程では専攻を組み替え、英語だけで修了できるプログラムも発足させ、進学を希望する海外の学生の面接を、スカイプを通じてすでに行なっています。

以上のような改革には、大きなメリットがあると同時に、研究者それぞれの調査研究時間の確保が難しくなっているなどのデメリットもあります。教員も職員

も余裕がない働き方を余儀なくされています。しかし、国立大学の予算削減は今後続くことが予想され、加えて、研究と教育の両面において新しい改革の取り組みがなされているかどうか、その取り組みの成果はちゃんと出ているかなども査定されるようになっており、これから新しい状況に対応した改革への取り組みを避けて通ることはできないと感じています。

人文社会科学の多様な学問分野を幅広く、またそれぞれを深く学ぶことができないのが、教養学部の大きな魅力であることに変わりはありません。また、いずれの専門を学んでも、「集める」「分析する」「伝える」という、激変するグローバル社会にあってもけつして古びることのない学びの術が身につくカリキュラムを用意し、丁寧な研究指導を行っていきます。

これまで以上に同窓会のみなさまのご協力を賜ればと存じます。

転退職される先生から

小谷一郎先生

(中国近現代文学)

ある思い

先日、池袋で教養学部の先輩など、9人ほどの先生方と酒席を共にする機会を得た。一番年下の方が今年59歳という若さで、年に一、二回気儘に開かれている。

宴もたけなわとなった頃、お店の出してくれた「くじ」に「ハズレ」が相継いだのを機にいつしか子供の頃によく通った「裏店」、「一銭店屋」(私の郷里仙台では裏店のことを一銭店屋と言ふ)の話になった。一銭店屋では「くじ」のことを仙台弁で「とすけ」と言い、「ハズレ」のことを「スカ」と言った。そうしたら最長老83歳のK先生が、「そうそう、東北の人は裏店のことを一銭店屋って言うんだよね。一銭店屋って好い言葉だ」と言われた。K先生は国語学、日本語が専門である。

次いで、「ジャンケンポン」の話に移った。「それじゃあ、ジャンケンポンのこととは何と言われました? 仙台では『イシケンギ』と言

うんですよ。」と尋ねた。かつてNHKのテレビ番組に「グーチョキパー」というドラマがあった。私には「グーチョキパー」という言い方はいささかバター臭くてピンとこなかった。「ジャンケンポン」もそうだった。何とも東京くさい、教科書的な響きを感じていた。

学部長をされたことのある西洋史のO先生は、「私はジャンケンポンだったね。」と言われた。先生のおられた神奈川、東京ではそうだったかも知れない。やがて、日本古典文学のH先生が「私の千葉県では『チッケッタ』と言います。」と言われた。千葉県で「ジャンケンポン」のことを「チッケッタ」と言うのは私も聞いていた。私はマスターの頃、千葉県我孫子の叔父の家の離れに間借りしたことがあり、その頃近所の子供たちが「チッケッタ」と言っていた。

私は続けて言った。「宮城県石巻、金華山の先に江ノ島という島があるんですよ。そこでは同じ宮城県なのに『ジャンケンポン』のことを『ソウリヤア・ケンジョ・シツチイシツチイ』って言



うんです。本当にビックリしましたね」。皆も、「へエ・エ」と驚かれた。O先生、H先生が期せずして、「こうしたことは記録しておかないと」、「文章化して残しておかないといけないね。」と言われた。私もそう思った。すると、奥にいた元学部長のS先生がふいに、「山形では『キー・イツ・サン』と言うんですよ。」と言われた。S先生は中国古典思想が専門で、子供の頃山形県寒河江市に住んでいたことがあった。山形には何度も行ったことがあるが、「キー・イツ・サン」と言うのは初めて聞いた。同じ東北でもこうした違いがあることを改めて思い知らされた。酒席は緩やかに、

賑やかに、楽しく過ぎていった。

私は29歳の時広島大学総合科学部講師となった。その後埼玉大学教養部にてのお話があり最初はお断りしたのだが、恩師の一人であるM先生から「首都圏ですけれど、帰ってきませんか。」とお誘いがあって決断した。私はM先生によって育てられ、先生が主宰されていた東京大学東洋文化研究所で開かれていた「中国1930年代文学研究会」で育てていただいた。私はM先生、I先生、もう一人のM先生、そして研究会の諸先輩Aさん、Sさん、Kさんたちと再び研究会で会えることが楽しかった。

学部の大学院担当から教養部へと移ったことでとやかく言う人もいたが、そんなことはどうでもよかった。

本当に楽しかった。M先生、I先生、もう一人のM先生、先輩のAさん、Sさん、Kさんたちをはじめ、研究会の方々と過ごした時間は生涯忘れることはないだろう。実にのびのびと自在な時を過ごすことが出来た。その時があったからこそ今の自分があるのだと思

う。

広島大学は大好きな大学ではあるけれど¹³学部もあって、大きすぎて大学全体がよく掴めなかった。そこへ行くと埼玉大学は5学部1研究科でこぢんまりとしていて分かりやすかった。身の丈に合った大学、分相応の大学だと思った。にもかかわらず、「こんな海のな

い県にいられるか。三陸の魚、瀬戸内の小魚も食べたから、今度は山形が秋田の日本海側に行つて日本海の荒波に揉まれた魚が食いたい。」と嘯く私に、女房はいとも簡単に「あなたはここに定年までいる。私は端からそう思っている。」と言った。

「何言つてやがる。」と思つていたが、十数年前の冬、山形大学の友人に教えを請いに行つた時、冬の酒田、山形市内（酒田は2階まで雪に埋もれている。山形市内は一つ通りの横に入れば路面は凍つていて車も来るから、人は左右に高く積み上げられた雪の上を歩かなければならない）を見て、「山形に住むのは命がけだ。俺なんかにはとても住めない。」と思つた。その山大の

友人も私と同じく今年晴れて定年となる。

私は埼玉大で自分の好きなように生かせていただいた。教養部の最後あたりから大学全体がどこか世知辛くなつてきて、時には腹の立つこともあったが、満足している。学生さんは良い学生さんが多かった。さすが国立大学だと思う。事務の方々にも「アナログ派」の私を最後の最後まで支えていただいた。同僚にも恵まれていた。楽しかった。

ここまで来れたのは本当に皆さんのお陰だと心からそう思う。

小出慶一先生

（日本語学）

埼玉大学での11年半

埼玉大には2004年に赴任して、教養学部日本アジア専修で11年半お世話になった。ぼくにとつて埼玉大は5つ目の職場になるが、最後の職場が埼玉大で幸運だったと思う。研究の面で有能であるだけでなく、学部の運営、教育の場面で熱心にかつてきばきと仕事をされる同僚の先生方には、いつも敬意を感じてきたが、ぼ

くの方は何もしいままに、その恩恵に浴すだけで、しかも、のびのびと過ごさせてもらったのはありがたいことだった。何事もいい加減な性格のぼくが無事に過ごせたのは、教養学部の、あるいは、教養学部にいるみなさんの、ものごと

にこの例として適当かどうかかわからないが、こんなことがあった。おおつぴらに書いていいのかわからないが、着任が10月だったので、その翌月11月にはもう編入試験というものにかかわることになった。こちらは勝手がわからないので、とにかく試験の日は集合時間だけには遅れないように集合場所に行き待機していたのだが、ところが、集合時間になつてもかなりの人が来ていない。あいさつに立つた学部長も無然とした面持ちで、みなさんもう少し緊張をもつてことに当たつていただきたいなどと苦情まじりのあいさつになったのだが、そのうちいつの間にか全員の顔が揃い、結果としては、無事に試験は終

了する運びになった。そのとき、この職場なら何とか勤まるのではないかと、場違いな安堵感を持ったことを覚えていて。もちろん、学部メンバーの名誉のために急いで付け加えれば、その後、このようなことはほとんどなくなつた。度が過ぎてはまずいけれど、多少のゆるやかさが許される雰囲気は大事なように思う。

着任当時の話のついでに言えば、着任当時印象に残っているのは、建物のことである。当時の教養学部の建物は、お世辞にも立派とか、きれいと言えらるものではなかった。全体に老朽化していたのではないかと思う。中でも一番印象的だったのは、研究室の水だった。研究室には、小さな流しが



付けられていて、手を洗ったり、お茶を飲んだりするためのものだったのだろうが、研究室への引越しの作業が終わり、さてお茶でも飲もうかと思つて、蛇口をひねってみると、流れ出てくるのは鮮やかな赤茶色の水ばかり。数分間流しっぱなしにしても、赤茶けた色には変化がない。ドアの建付けが悪いのにも驚いたが、この水には驚ろかされた。着任の翌年だったか、ある委員会でオープンキャンパスの相談をしていた際、「教養学部棟は、高校生たちには、見せちゃだめだよな」という発言があつた。最初は冗談かとも思ったが、委員の面々が一樣に頷いているのを見て、これは共通認識なのだな、と納得した覚えがある。今やきれいに改装され、高校生に見せられるようになったのは嬉しい。

ところで、その教養学部棟が改装されたのは2007年ごろだったろうか。改装のため、2006年春には、一部の専修が、改装の終わった教育機構棟（教養学部の隣の建物）に移るようになった。新教育機構棟

は、廊下も広く、階段室の採光も十分で、壁は淡いクリーム色、明るく清潔感にあふれていて、移った当初は、大げさに言えば、まさに別世界にきたような感じだった。研究室も、水道設備はないものの、広さは倍近くあり、天井も高く、開放感にあふれたものだった。

そして、研究室が広くなつたおかげで、10人程度の授業なら、研究室でもできるようになるということもあつたが、なによりよかつたのは、学生たちとここで打ち上げと称して、食事会や飲み会を開くことができるようになったことだった。多くの担当していた日本語学関係の学部生、修士学生と一緒に集まって、宴会を開くということも何回かあった。学期の終わりが、食べ物、飲み物を持ち寄るという方式だったが、ときには、留学生が中国式水餃子、ベトナム式生春巻きなど、研究室で手作りし、本場の味を楽しんだこともあった。水餃子は500個近く作つたのではなかったかと思う。教室で見ている学生とはまた別の面を発見するのが常で、そうやって、

いろいろな学生の人となりを知ることが楽しいことでもあつた。また、彼らの若さというか生命力と同じ場にいられることは、同世代、上の世代がだんだん老化していく環境にいと、よく考えてみると、ずいぶん贅沢なものでもあつた。

写真は、つい先ごろ、2016年1月27日、修士の最後の授業が終わつた後、学生たちが開いてくれた飲み会の折のもの。

埼玉大でお世話になつた11年半を振り返ると、寛大でかつ優秀な方々を同僚とすることができたこと、新しくて広い研究室に移れたこと、そのおかげでさらに、多くの学生たちと酒を酌み交わしつつ深く知る機会ができたこと、すべて埼玉大で遭遇した幸運だった。よい11時半を与えてくれたことをみなさんに感謝したい。

同窓生から

「奥の細道」

独り歩きの記事

千代正明（69年卒）



なぜ「奥の細道」？

なぜその日付に気が付いてしまったのだろうか。2014年秋、「奥の細道」の解説を読んでいた私の目に「10月4日」が飛び込んできた。新暦でいうその日に芭蕉が「奥の細道」の旅を大垣で結んだとある。なんと2015年のその日は、私の70歳、古稀の誕生日である。瞬間的に芭蕉の歩いた通り歩き、同じ日に同じ場所にととうと決めた。動機とはかくも単純である。定年まで勤めた国立国会図書館の俳句の会に今も参加しているとか、亡き妻の里の山形も通るとかは後付けの理由である。

元禄2年（1689年）、春から秋にかけて150日、600里の旅が芭蕉の「奥の細道」である。幸い芭蕉は句会や休養やらで所々で長期の逗留をしている。その間をうまく使えば、芭蕉と同日（新暦換算）同場所

という私の奥の細道のコンセプトも無理なく思えた。が、それが叶ったのは、5月16日の深川出発と、10月4日の結びの地大垣到着の2日のみであつた。

独り歩きの実態

私の奥の細道は、49泊64日である。15回自宅から出かけたことになる。独り歩きである。曾良はいない。「独り」の例外は、月山頂上から湯殿山への山歩きを一緒にした若いカップルである。奇遇にも2人とも私が退職後5年間教えた立教大学の英語の教員であつた。月山8合目の御田原参籠所で声をかけていただいた縁による。

「歩き」の例外は多い。芭蕉が馬や船を使っているのに、こちらも時々電車やバスを使わせてもらった。往復同じ道の場合は、片方は交通機関を利用した。一関―平泉、酒田―象潟、黒羽の雲巖寺や福井の種の浜への行き帰りなどである。夕方宿のある駅まで電車を使ったこともある。その場合、翌朝前日歩いた場所まで戻つたが、句碑等ない時には、その区間をパスさせてもらった。

歩きはじめ

芭蕉と同日の5月16日に
 出した第1回の旅は3泊
 4日、深川から栃木県壬生
 までである。同日は芭蕉の
 旅立ちを記念して、NPO
 法人本所深川が主催する
 「おくのほそ道追体験ツア
 ー」が実施され、千住に向
 かう船が用意された。船中
 では、「升本」のお弁当をい
 いただき、俳人の堀本裕樹氏
 を選者に句会も催された。
 例年は千住で船を下りての
 散策であるが、本年はその
 まま深川に戻り、近在の芭
 蕉ゆかりの地を巡るという
 ツアーであった。

初日の旅立ちの興奮は、
 船上句会で入選句に選ばれ
 たこともあって、千住に向
 け歩き始めた時には最高潮
 に達していた。そのルンル
 ン気分が、船ですで行った
 南千住までは電車ではいい
 のではという内なる声を消
 し去った。また薄暮の北千
 住で、そろそろ宿をとの思
 いも芭蕉は初日春日部泊ま
 りだとの声にかき消された。
 その結果、午後7時を過ぎ
 ても旧日光街道沿いに宿は
 なく、やむなく交番に飛び
 込む羽目となった。大垣到
 着まで、こうした事態に何

回となく遭遇したが、まさ
 か初日からお世話になると
 は誰が想像しただろうか。

2日目もこの失態が尾を
 引いた。芭蕉に追い付きた
 いとの焦りから、5万2千
 歩を歩いている。この日も
 中途半端なところで暗くな
 り、また警察署に飛び込み
 宿探しとなった。幸い8キ
 ロ先にホテルがあり事なき
 を得た。足は豆で血が滲み、
 親指は死んで真っ黒。30リ
 ットルの重いリュックに首
 は回らず、肩はパンパンと
 なった。2日目の幸手の宿
 で早くもマッサージのお世
 話になろうとは。最初の歌
 枕の地、室の八島を巡った
 4日目の夕方、壬生から葉
 山へ戻る私の姿は、敗残兵
 のごとくであった。芭蕉は
 すでに日光である。

この最初の4日間の失敗
 が、貴重な教訓となった。
 芭蕉の黒羽での13日間の逗
 留を幸い、改めて装備等の
 万全を図った。靴と靴下を
 本格的なウォーキング対応
 に新調し、豆対策の葉や絆
 創膏を準備した。リュック
 を15リットルに変え、荷物
 を極力減らした。必須の案
 内本5冊は、必要部分だけ
 切り取って持参するように

した。足の痛みが癒えた6
 月7日、準備万端、満を持
 して2回目の旅立ちを敢行、
 その後大垣到着まで、二度
 とマッサージのお世話にな
 ることはなかった。

忘れえぬ風景そして人々

芭蕉が訪ねた歌枕の地は
 ども芭蕉の句を思い出す
 風景があった。また、電信
 柱の影だけが猛暑の日蔭と
 いう一本道、何度往復して
 も人っ子一人通りにいない
 集落、コンビニを砂漠のオ
 アシスと感じざるを得ない
 町等からも強いインパクト
 を受けた。

果てしない数の人と言葉
 を交わした。それぞれに人
 がいてドラマがあった。書
 くゆとりはないが、今なお
 各々の顔と場面がありあり
 と思い浮かぶ。独り歩きと
 いう極度の緊張感が記憶を
 濃くしているのであろうか。
 妻に先立たれ、いつ死んで
 も思ってたが、生への
 未練を何回となく感じた旅
 でもあった。

雪の鹿兒島より

上尾崎より（教養91年卒）

86年入学、国際関係論コ
 ースを卒業しました上尾崎

（旧姓岩澤）と申します。
 高校時代に進路を絞りきれ
 ず選んだのが教養学部でし
 た。桜島の火山灰にまみれ
 て地元の大学に通うのを極
 力避けたかったのも理由の
 一つではありますが、埼玉
 に親戚知人がいるわけでは
 なく、見知らぬ土地にひと
 り降り立った不安と期待と
 解放感は今も鮮明に蘇りま
 す。埼京線が開通した翌年、
 与野本町駅付近のアパート
 に住み、普段はロヂャース
 で購入した自転車、雨が
 降る日は一時間に一本ある
 かないかの志木バスで通学
 しました。

全国から集まった友人た
 ちと、慣れない標準語イン
 トネーションでよく語りよ
 く遊びよく飲みました。奔
 放な大学生活を満喫したお
 陰でいろいろと危ぶまれる
 局面もありましたが、高山
 巖先生の多大なる御厚意に
 より、何とか無事卒業する
 ことが出来ました。

現在は自宅で英語教室を
 しています。小中学生を中
 心に2歳から大人まで約
 50名の生徒さんが通って
 来ています。また地域の
 小学校で英語指導補助をし
 たり、講師仲間と英語のシ

ョーをしたりと、歌ったり
 踊ったり演じたりの日。
 趣味の延長的な仕事で生活
 が成り立っており有難い限
 りです。

ところで昨年から非常勤
 で勤めている私立校に、現
 社コース出身の先生がいら
 っしゃいます。この歳にな
 って初めて同郷で後輩に巡
 り会ったことに驚嘆すると
 共に、今回の原稿依頼のお
 話を頂いたこと、タイムリ
 ングの妙を感じざるを得ま
 せん。

帰郷して20年、大学に関
 するご縁がこのように浮上
 して来たのは、約4年前か
 らの同級生とのインターネ
 ット上での繋がりがきつ
 けです。フェイスブックで
 の交友の復活は、大学生活
 の始まりと同様に新鮮でワ



後輩は2004年卒高橋功二さん

クワクし、それからの4年間は、学生生活の4年間とは比較にならないスピードで過ぎ去った気がします。

もう二度と会うことはないだろうと思っていた友人たちとの再会も次々と果たしました。生協でしていたよりも頻繁に、日々近況報告をし合うことが出来るのは今の時代ならでは。子供たちのオンラインゲームやYouTube 浸りを戒めてもどうも説得力に欠けてしまいます。

さて、我が子たちが進路について考え始めるにあたり、大学について話す機会も増えてきました。夢を持つて、目標を定めて、それに向かってなるべく早くから準備と努力をしよう、というご時世ですが、私自身は目標など定まらないまま大学も入学卒業し、その後も右往左往しながら歩んできました。好奇心のままにあちこち足を突っ込みいろいろやっていくうちに、少しずつ周りから求められることが出て来て、その中でやり甲斐を感じるものが現れてきました。人より時間はかかったかもしれませんが、今は「私のミッション

ってコレなのかも！」と考えることに出会えて満足しています。遠回りの分が相当な糧になっているとも感じます。こんな生き方が出来たきっかけの一つにあって、卒業してしばらく経った頃、他の友人たちが「大変だね、よくやっているね。」と同情と励ましの言葉をかけてくれる中「なんだかんと言っていてアナタが一番面白い人生送っているかもな。」と言ってくれたのです。ものすごく楽になりました。

一般的に言うところの「苦勞」は「面白いこと」に変換出来るんだ、と気付いたのです。今日の苦勞や失敗は明日の話のネタにすればいいんだ！と。

子供たちには「夢や目標は後からでもいいよ、いろんな友達作っているんなことすればそのうち楽しい人になるよ、大学行けば友達幅も広がるよ。」としか経験上からは言えません。知識を増やしスキルを身に付けること以上に良い仲間巡りに合うことで私の人生はより面白く豊かになったと思っています。

最後に、フェイスブック同窓会では、温泉旅行や上

海同窓会、SMD氏のハリウッドデビュー祝賀会、などこれからまだまだ楽しいことが目白押しです。実現に向けてそろそろ本格的に健康にも留意しながら共に年を重ねていきたいと心から願っています。

開発コンサル

タントの食事情

中川和広（04年卒）

国際関係論コースを卒業後、大学院や商社を経て、現在開発コンサルタントとして働いています。開発コンサルタントとは、開発途上国の実施機関が、開発援助プロジェクトを実施するのに、サポートする職業です。その職業柄、1年の大半を途上国で過ごすこととなります。

日本とは文化も習慣も異なる国で、その国の人たちと出会い、プロジェクトの成功を目指し一丸となつて業務に邁進できる点は、開発コンサルタントの大変魅力的な点ですが、反面、その違いからカルチャーショックを受けることもあり、

ストレスがたまることもあります。

その際の私のストレス解消法はその土地の美味しい食べ物を食べることであり、本稿では私が業務で長期滞在した国々での食事情、特に美味しい食べ物を紹介させて頂きます。皆様、当該国へご旅行の機会ある際には、是非御参考になさってください。

まず2009年から約2年半滞在したインドネシアの首都ジャカルタからご紹介致します。インドネシアは世界最大のイスラム教徒を抱える国であり、その食文化もイスラム教の影響を多分に受けていると思つて

いたのですが、実際に行ってみると、ジャカルタは人口が950万人を超える世界屈指の国際都市ということもあり、イスラム教で禁忌とされているアルコール（ビール）が、普通にレストランで出てきたり、同じく禁忌の豚肉を用いた豚カツ屋やとんこつラーメン店も進出しており、別の意味でカルチャーショックを受けました。滞在当初は、お腹を壊すこともありましたが、日本食レストラン等各

国のレストランも多々あり、食事に困ることはありませんでした。



インドネシアで最も印象に残っている料理は、ミーアヤムです。ミーアヤムとは、鶏（アヤム）の麵（ミール）の意味であり、つまり鶏ラーメンです。鶏ガラで取った澄んだスープの中に、縮れたたまご麵が浮かび、トッピングはシンプルにしようばく煮込んだ鶏肉と青菜のみです。味は見た目の通りさっぱりしており食べやすく、朝からでも大盛りで注文することも多々ありました。ちなみに、インドネシアの方は、そこに更に刻んだ青唐辛子をたっぷり入れますが、私には辛過ぎて無理でした。

次は2012年から約3年間滞在したバングラデシュの首都ダッカの食事情です。バングラデシュへ行く直前は、上述のインドネシアの経験があったため、イスラム国とは言っても、アルコールや豚肉の提供はあるだろうと思っていました。

が、バングラデシュはより厳格なイスラム国であることが判明し（ビールは高級ホテルのレストランでしか出てこないし、値段も350ml缶で約千円と高額。豚肉は中華レストランのメニューの端に少しだけ載っている程度だし、普通のスーパーではまず購入できない）、ショックでした。

しかしながら、バングラデシュの伝統的な食事もまた独特で大変美味しい料理も多々ありました。南アジアなので、香辛料をふんだんに使ったカレー料理はやはり有名ですが、ここではポッタを紹介させて頂きます。ポッタとは、すりつぶした料理（おかず）であり、魚のポッタ、青バナナのポッタなどがあります。このポッタを皿に盛られたご飯と手で混ぜて一緒に食べます。バングラデシュの方は、

食事は右手だけで、スプーンやフォークなどは使わず食べます。個人的に特にお勧めなのは、トマトのポッタで、すりつぶしたトマトに香辛料を加えたもので、程よい酸味があり、ご飯にとっても良く合います。

最後は、昨年（2015年）からちよくちよく出張に行っているミャンマーの首都、ネピドーの食事情をご紹介します。ネピドーは、2006年にヤンゴンから遷都された新しい首都であることもあり、まだ都市化が十分に進んでおらず、

周りは緑いっぱい、個人的には日本の軽井沢のような印象を持っています。そのため、レストランの数も少なく、食べられる食事も限られるのですが、ミャンマーは仏教徒が大半を占める国であることから、レストランではアルコールも豚肉もでてくるので、その料理は日本人の口には合います。と思います。

ミャンマー料理で感銘を受けたのは、モヒンガーと呼ばれる麺料理です。麺は、ベトナムのフォーと同様にコメの麺を使いますが、スープはナマズからとった魚

のスープです。最初はナマズのスープと聞いて少し抵抗があったのですが、一口食べてみると深いコクがあり、レンゲが止まらなくなりました。モヒンガーは箸ではなく、レンゲで麺をすくって食べます。そこにパクチーやライムを添えるとなすっきりとした味わいとなり、更に美味しくなりますので、ぜひお試しください。

現役生から

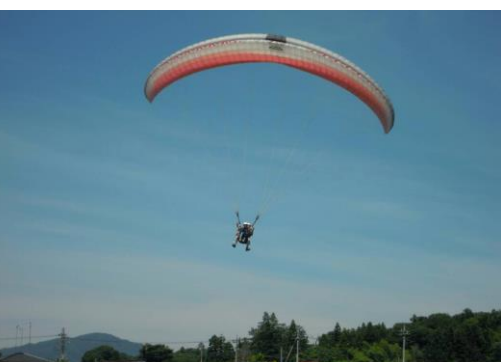
埼玉大学に入学

土平真奈美（2年）

去年の春に埼玉大学に入学してから約1年が経ち、様々な出来事がありました。わたしは主にサークル活動とアルバイト、学校生活に

ついて書くかと思っています。まずサークルについては、「Try me」と「Vox Ventus」という2つに所属しています。Try meは埼玉大学に来ている留学生と交流するといふもので、月に1回程度食事会に参加して英語を使用しています。Vox Ventusはパラグライダーをするサークルです。週末に群馬県の水の上まで行き、マスターと呼ばれる埼玉大学のOBに指導して頂いています。

パラグライダーはマイナーなスポーツですが、空を飛んだ時の感動と爽快さは他のスポーツでは味わえないほど素晴らしいです。水の上まではレンタルカーを借りてドライブをしながら行き、お昼ご飯は皆で青空の下で食べ、帰りには温泉にも寄るのでパラグライダー以外にも楽しいことが沢山あります。サークルのOBさんなども水の上に飛びに来てくれることもあります。私も社会人になってからも趣味としてパラグライダーを続けたいかと思っています。



と様々なアクティブな活動もしています。パラグライダーのサークルは他の大学ではあまりないと思うので、埼玉大学に入学してこのサークルと出会うことができると本当に良かったです。次にアルバイトについてです。私は地元のレストランでアルバイトをしています。最初は慣れないことも多く失敗ばかりしてましたが、次第に様々な仕事を任せてもらえるようになりました。また初めて自分でお金を稼ぐようになり、お金のお大切さと稼ぐことの大変さを実感し、今まで沢山のお金をかけてくれた一層両親への感謝の気持ちを持つようになりました。

私は茨城県に住んでおり、



大学に2時間かけて通っているの、で学校とアルバイトとの大変なときもあります。が、とても楽しくてやりがいを持っているので続けていきたいと思っています。

学校生活では、沢山の友達を作ることができました。サークルでも出身地が多様なので、いろんな地方の話を聞くことができて楽しいです。独り暮らしをしている友達も多く、泊まらせてもらったり、友達の家でご飯を食べたりすることもあります。

授業については、教養学部は他の学部と比べて選択授業が多いため、自分の興味がある授業を多く取ることができます。また、勉強する分野も国際関係学から哲学、社会学までとても幅

広いです。私は社会学と途上国の開発問題について興味があり、2年生以降の専修に分かれてからは更に自分の専門性を高めていきたいと思っています。

また今年の授業の中で私が一番心に残ったものは、夏休みの特別課外授業でカンボジアに行ったことです。途上国に行くことは初めてでしたが、日本とは何もかもが違っていました。カンボジアでは、現地のNGOの手伝いをしようと農村調査を行いました。他にもカンボジアの内戦の歴史を学んだり、首都プノンペンやアンコール・ワットを観光したりと多くのことを体験しました。プノンペンはとても賑わっていて、まさに経済発展を遂げているという印象を受けました。

私はカンボジアは東南アジアの仲でも開発が遅れていて、貧しいというイメージを持っていましたが、そこに住む人々は家族や伝統を大切に、自然とともに生活をしていました。戦後の急速な経済発展を遂げた日本が忘れてしまっている大切なものが沢山あり、お金がなくても幸せな暮らし

をしていると感じました。

このように振り返ってみると、大学生になってからの1年間で行動の幅がとても広がり、様々な新しい経験をして自らの成長に繋げることができました。2年生以降は資格を取ったり、カンボジア以外の海外にも積極的に行き、大学の授業はもちろんのことその他の経験も多く積んでいきたいと思っています。

**今しかできないよ。
というけれど**

工藤拓人（3年）

友達との出会いは入学前に開催された新入生交流会の場であった。埼玉出身者が想像していたよりも少なく、多くが地方から上京してきた人たちだということとは驚きであった。その会で私の後ろに座っていた長崎からやってきたという彼は、訛りがきつく、私から話しかけたものの、何を話しているのか分からなかった。今でも、意気投合した仲間たちで、授業が被ると自然と集まり非常にうるさくなる。この会には私にとって非常に重要なものであつ

た。

こうして大学生活がスタートしたわけであるが、当然楽しいことばかりではない。環境が変わり、バイトも新しくなり、慣れないことが多く、1年前期は非常に大変だった。特に、理系科目を必修として取らなくてはいけないこと、また、新しく始めた塾のバイトで「数学」の担当になってしまったことが私を苦しめた。理系科目と私はセンター試験を最後に決別したのである。人生で2度と関わらないと決めたのになぜまた。それには、教養学部の選択の幅の広さが少なからず影響している。語学や文学、メディア、芸術など人によって多種多様である。教養学部多くの学生が経験するのは、教育学部と間違われて「先生になるの?」と尋ねられることである。そのとき否定するのはいいものの、「じゃあ自分が何を学んでいるのか。」を伝えることは非常に難しい。

このように、「わかる人にはわかる」学問が多いように思う。これまでの2年間は、自分のやりたいことをとことんやるというよりは、

幅広い選択肢から自分のやりたいことを探りつつ、卒業に必要な単位を取得するために授業を受けていた人がほとんどであると思う。

ただし、卒業に必要な単位といっても、必修科目は無いに等しい。例えば、私の所属する現代社会専修の必修は2つだけである。しかし、私の友人がこのうちの一つの単位取得に失敗したため、私と彼含む4人が、裸として3日間不眠不休で四国八十八ヶ所を車で巡拝した。当然これは失敗に終わったが：（55寺でタイムアップ）。

せっかくなのでここで、2年間の思い出も紹介したい。中でも印象深いのは、1年生の春休みにあった「免許合宿」である。電車とバスを乗り継いで30時間以上を費やして長崎まで行き、そこで3週間を過ごした。世界遺産登録前の軍艦島や、ハウステンボス、少し足を伸ばして熊本にも行くことが出来た。暖かいのに花粉症にもならず、いいホテルで過ごしながら免許を取ることができ、非常に充実していた。免許取得後は、日本各地でドライブを



楽しんでいる。四国のガードレールも街路灯も無い山道は、初心者の方々にとつてちよつぷり刺激的であつた(笑)。

また、昨年の夏に、教養学部2年の野郎9人で八丈島に旅したのもいい思い出になった。貧乏旅なので観光地で写真を取ったり、ゲルメを楽しんだりするようなきやつきやとした感じは全く無い。八丈島からの帰り、上下ジャージのまま飛行機に乗り、山手線に乗って埼玉に帰ってきた彼が、その旅の様子を物語っている。日中は海で体力の限界まで泳ぎ、夜は島をドライブし。雨も降ったが、虹を

見ることもできた。あの夏の一つ一つの景色を一生忘れることは無いであろう。

このように全国各地への旅を楽しんでいるが、どこに行っても、見ず知らずの大人たちは言う。「今しか出来ないよ。」と。どの大人も口をそろえてそう言うのだから間違いないことなのであろう。これまでの2年はあつという間に過ぎ去つた。時間の大切さを身にしみて痛感する今日この頃である。短い時間で出来ることは限られている。

私の大学生活

鈴木翔太(3年)

故郷である北海道を離れ、埼玉という見知らぬ地へ一人で飛び込み、埼玉大学で知を育むと決めてから2年の月日が流れた。これまでの私の大学生活は新発見ばかりであつた。

埼玉へと移り住み、私はまず関東の気候と北海道の気候のギャップを強く感じた。当時は3月。実家の北海道では雪がまだ降り積もつており、気温も氷点下になることも少なくはない。一方、埼玉はというと桜が

咲いていた。新発見だ。気温も10度を簡単に越していた。気候だけでここまで違うのかと思ひ、外国にでも来てしまったのであろうかと錯覚したことさえもあつた。これからの大学生活に不安に思つたことを覚えて

いる。私は基本的にフレンドリーな性格であるため、大学生活においても友達作りというものに対しての心配は少なかった。案の定たくさんの友達ができた。しかしこれも案の定といえば案の定なのだが、私の友達の大多数は男友達であり、男女比が4…6である教養学部でも男が集まってくるのであつた。もう少し男女間の交流が多いバラ色の大学生生活をイメージしていた私にとつてがっかりであつたが、このことをここで書き連ねてしまつたら原稿が足りなくなつてしまうので割愛しよう。

埼玉大学には様々な地域から来た学生がおり、北は私の故郷である北海道、南は沖縄県から来ていることが驚きであつた。様々な地域の友達を作り、故郷の話を交換することで私の一人

暮らしに対する不安は徐々に溶けていった。本当に私は女運がない代わりに友達には恵まれているなと思う。

勉学においても新発見ばかりであつた。大学の勉強は高校までの受動的なものとは打って変わり、生徒自身が能動的に勉学に励まなければならぬのだと痛感させられるばかりである。入学当初はそのシステムに戸惑いもしたが、現在ではその自分の学びたいことが自由に学べるという環境がとても恵まれたものだと感じ、日々自分の将来への糧となるような勉強を楽しんでいる。

私は現在2つのサークルに所属している。1つは「お笑いサークル」もう1つは「旅サークル」だ。お笑いサークルでは月に1回大学の1室を使つてお笑いライブを行っている。自分たちでいうのはおこがましいこととはわかつているが、なかなか面白い。現在私はこのサークルの会長を務めており、毎日面白さとは何かについて考えることに余念がない。面白さを追及すること、学問とはまた違った発見があり実に面白い。と

いっても、そこまでお堅いサークルではなく楽しいサークルである。

もう一つ、旅サークルにも所属している。このサークルでは2か月に1回程度のペースで旅行を行う。旅行先は近場では日帰り東京や栃木、千葉などに赴くこともある。遠い場所への旅行もあり、北海道、沖縄などがある。4泊5日程度のかかなり大きな旅行である。最近の活動では今年の3月初めに長崎に2泊3日で行くことを企画している。

毎週ミーティングを行つており、サークル内の雰囲気もワイワイとしており様々な地域から来た人たちと旅行をすることはとても新鮮であり、新発見も多い。男女比が8…2くらいであ



ること以外はいいサークルであるそんなに女子に飢えているわけでもないがと負け惜しみを言っておこう。

私の趣味は「旅行」である。そのため私はサークル活動以外でも学部友達と旅行に行くことが多い。しかし、彼らは相当なバカ集団であり、旅の醍醐味は過酷さだと言わんばかりに、四国八十八か所を4日で回ると言い出したり、八丈島を車で爆走したり、深夜バスで博多まで行ったりなど様々な過酷な旅を行ってきた。この中でも最も過酷だった旅は四国八十八か所である。実際に行ったらわかるのだが、四国の道はかなり細く、荒れている。運転免許を取得したての我々にはかなり厳しいものであった。旅は人を成長させるとは本当なのである。このメンバーでの旅行を終えるとなんだか一回り成長した自分を発見してしまうのだ。そのため、彼らとの旅も新発見の連続である。

私の大学生活は高校時代思い描いていたものとはかなり違っていた。しかし、その代わり私の大学生活には新発見がたくさんあった。

そのどれもが私の貴重な経験として10年20年先でも新鮮なままであり続けるだろう。残りの大学生活でどのような新発見があるか、今から楽しみである。

あづかるぞ

けやき会総会

2015年けやき会総会を6月27日(土)に北浦和駅前の埼玉県立近代美術館で開催しました。

講演会

午後1時半から田代脩(埼玉大学名誉教授)の講演『太平記絵巻』と武蔵武士』がありました。市民にも公開し、けやき会関係者43名それプラス市民31名の参加者があり、合計74名になりました。

○講演会の概要

『太平記絵巻』は南北朝時代の軍記物語『太平記』を題材に江戸時代前期に描かれ、全12巻中10巻の現存が確認されている。そのうち5巻は埼玉県立歴史と民俗の博物館に所蔵され、埼玉県指定有形文化財となつ



ている。講演では同館が米英のオークションで購入した経緯やエピソード、絵巻が成立した過程や描かれている武蔵武士の活躍の場面などについて、興味深くお話しいただきました。

同窓会総会・懇親会

活動・会計報告・活動計画など全議案が出席者全員の拍手で承認された。43名参加。続いて近代美術館内のレストランでインタビューを中心と同窓生、先生方、学生が親しく懇談できた。参加者41名

2次会(北浦和西口 庄屋)

懇談会以上に膝を交えて楽しく懇談した。懇親会2次会とも現役生6名は会費無料なのでもっと多く参加させたい。

教養学部50周年

1期会の開催

2015年9月26日(土)川口駅前の『賀茂川』にて開催。毎年同期会を開催しているが、今回は教養学部創設50周年らしく、各課程の当時の様子やバイト・就活・暮らしなどの苦労など、出席者全員に話してもらった。今回の場所は、町田君(剣道のため8年間大学で腕を磨いた剣士)推薦の日本料理店で本格的な懐石料理が味わえた。1期生百数十名のうち29名出席で、たいへん盛り上がった。2次会も銀座ライオン川口店で話し足りないとはかり、旧交を温めることができた。



埼玉大学の改革

2学期制(前期・後期)

から4学期制へ

2016年度から何十年も続けてきた2学期制を4学期制に改革を行う。

1年を4つのチームに分割し、基盤科目は、基本的に1つの科目を週2回授業を行い、1チームで終了する。ただし体育などは週1回で2連続の授業となる。専門科目は週1回で2チーム連続で取るようになる。登録できる単位の上限は2チームずつで、24単位である。

4学期制のメリットは、1チームで終了する授業制を取ることににより、海外留学、学外学修が容易になる。たとえば2チームと夏休みをあわせた海外留学や、第4チームと春休みを合わせた長期の学外学修が容易になる。1チームの受ける科目数が減るので、少数の授業に集中でき、学修効果が高まるのではないかと考えられる。さらに期末試験も少ない科目に集中して準備できるようになる。

けやき会寄附講座 『経済事情—グローバル時代におけるキャリア形成—』後期3時限 ※講義のみ記載

10/9	グローバル時代に成功するには	鶴谷武親 (22回生)	ポリゴンマジック社長、早稲田大学 商学大学院客員准教授
10/16	グローバル時代の キャリア形成	田口美一 (13回生)	金融経済アナリスト、元日本銀行、 クレディ・スイス証券
10/23	グローバル時代の 興隆と観光立国	澤渡貞男 (2回生)	元ジャルパック・サンフランシスコ 支店次長、駒澤大学講師
10/30	国際機関（国連） で働く	滝澤三郎 (4回生)	元国連難民高等弁務官事務所駐日代 表 東洋英和女子大学教授
11/6	中東・イスラム社会 における対日感情と その変化	榎木 誠 (2回生)	けやき会会長、元日本経済新聞編集 委員、学習院大学講師
11/13	会社起業とタイと の貿易	峰崎 進 (4回生)	(株)オーキス社長
11/20	地方自治体とグ ローバル化	岡野衣里 (39回生)	上尾市役所・地域活用センター派遣
11/27	国際開発コンサル タントの仕事	中川和広 (13回生)	開発コンサルティングOPMAC勤務
12/4	グローバルキャリア の磨き方	石澤和也 (36回)	㈱クボタ
12/11	自己発見のための 異文化理解	中村義実 (18回生)	敬和学園大学教授
12/18	学生による講義の 自分の意見発表	榎木 誠 (2回生)	けやき会会長、元日本経済新聞編集委 員
1/8	ヨーロッパでの仕事 と生活、そして歴史 との出会い	赤津光一 (2回生))	元JETROポーランド事務所長、
1/15	国際開発で大切な こと	加藤 基 (1回生)	前ガボン大使、埼玉大学客員教授
1/22	国際開発コンサル タントとコンサルタ ントから見た途上国	羽賀美樹 (45回生)	関西電力グループ㈱ニュージェック

2015 年度、寄附講座は3時限目に変更。例年 10 数名であったが、今年は 100 名近くの学生が聴講した。経済学部
の学生も約 45%もいた。教養 50%。



鶴谷武親さん



羽賀美樹さん



澤渡貞男さん

2016 年度教養学部入学案内のデータより

卒業生の就職(女子)			
	2008年度	2013年度	2014年度
卒業者数	208(135)	96(133)	98(120)
就職希望数	174(113)	70(118)	77(111)
就職数	150(97)	142(98)	158(99)
業種内訳(女子)			
	2008年度	2013年度	2014年度
建設	0	4(2)	4(2)
製造	20(11)	19(13)	19(16)
電気・水道	0	0	2(1)
運輸・通信	28(19)	15(12)	33(19)
飲食・小売	23(19)	22(16)	21(13)
金融・保険	28(20)	13(8)	24(19)
不動産	1(1)	1(1)	3(2)
サービス	23(14)	31(22)	20(12)
教育	10(3)	7(6)	11(5)
公務員	14(7)	26(16)	21(10)
その他	3(3)	4(2)	2(2)
大学院進学	17	14(7)	6(2)
計	150	156	6(2)

主な就職先

建設・製造	アルコブレン、ゲーテハウス、富士住建、西武建設、エイチワン、 ティ・エステック、丸大食品、味覚糖、日本ビーマック、アイリスオオ ヤマ、東タイ、武蔵野フーズ、ナプテスコ、東罐興業、ネットスエスアイ 東洋、BXティアール、富士ゼロックス、グレースストーン、大日本印 刷、エーザイ、ピアス、日立オートモティブシステムズ
宿泊・飲食・ 卸売・小売	日本リーテック、エネックス、アーバンリサーチ、カスミ、川徳、グリーン ロード、サンゲツ、セリア、ゾフ、パル、ビーボ、丸井グループ、ロ ア・インターナショナル、JX金属商事、アートグリーン、コーナン商 事、ジェイエック、新明電材、滝川、ツルゲン情報、トゥモローランド
運輸	JR東日本、西日本鉄道、近鉄エクスプレス
通信マスコミ	Blue Meme、PAGEONE、アクロシステム、イーブックイニシア ティブジャパン、ガウス、ココロマチ、テック・エス・シー、トスコ、日本 ビジネス開発、プランチ、マーカーネット、ヨコハマシステムズ、両毛 システムズ、GMO TEC、KCCSモバイルエンジニアリング、MHソ リューションズ、アットホーム、人間ケーブルテレビ、情報技術開発
金融・保険	東日本銀行、北洋銀行、北都銀行、AIG、三井住友銀行、八千代銀 行、NCF農林中金ファシリティーズ、オリックス、イオンクレジット サービス、烏山信用金庫、桐生信用金庫、銀泉
教育	MYFLONTIER、ケイライン、宇都宮大学、公立高校(英語)、公立中 学(社会)、筑波大学、法政大学
サービス・ その他	東京センチュリーリース、日建企画、ノグチコンピュータサービス、大 和総合研究所、トレンダーズ、アイ・エム・ジェイ、ホワイト・ベアー・ ファミリー、インテグレート、日赤栃木支部、東都保健医療福祉協 会、医療法人社団東京みどり会、埼玉県国民健康保険団体連合 会、DAサーチ&リンク、キャリアデザインセンター、ノア、あいら伊豆 農協、高見、日本生活協同組合連合会、日本郵便
公務	厚生労働省、警視庁、関東財務局、関東信越国税局、長野労働局、 栃木県庁、長野県庁、埼玉県庁、北上市役所、川口市役所、さいた ま市役所、狭山市役所、蓮田市役所、板橋区役所、練馬区役所、豊 島区役所、杉戸町役場、埼玉県教育委員会、長野県富士見町役場



祝
ノーベル物理学賞受賞
梶田隆章先生
(第81回物理学賞物理学科)
梶田隆章先生
埼玉県理学部

埼玉大学ホームカミングデー
2015年10月31日埼玉大学のホームカミングデーが開催されました。午前中は歓迎会で卒業生、教職員など約200名が参集し、大学の研究紹介などがありました。昼には卒業生の三遊亭彩大さんの落語を

ホームカミングデーに大学へ行こう!
2016年10月29日
歓迎会・10時30分
懇親会・午後1時半

2015年度入学者選抜実施状況(14年度)						
定員	日程	募集	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
160	前期	125	295 (324)	284 (311)	177 (175)	152 (167)
	後期	35	131 (126)	131 (126)	35 (35)	帰国子女7

出身校の地方別入学者数			
年 度	2013	2014	2015
北海道	6	5	5
東北	38	36	42
関東	76	73	79
(うち埼玉)	40	42	30
中部・近畿	24	34	23
中国・四国	10	7	4
九州・沖縄	7	10	11

埼玉大学文化人類学 50周年記念会に大集合!
日時:2016年11月5日(土)
午後2時~午後6時 会費:5000円
場所:埼玉大学大学会館・第2食堂
歴代の先生と全卒業生の懇親会
会長 須藤健一
(国立民族博物館 館長)
大学側委員・三浦敦先生
準備委員会



大学図書館 リニューアルオープン
大学図書館も古くなり、耐震性の問題や蔵書の増加に対応するため新しく建て替えられました。

補助金申請
ミニ同窓会(10名程度)に、けやき会より1万円補助します。2015年度は2つの申請しかありません。卒業して10年とか30歳とか60歳など区切りの年になるので計画しませんか。
教員の異動
水谷一郎先生↓退職
小出慶一先生↓退職
けやき会役員募集
現在の役員は現役の方がほとんどなので、実務を行

ミニ同窓会補助金申請	
会の名称	
代表者	氏名
	卒年
	郵便番号
	住所
	電話番号
	メールアドレス
実施日	
開催場所	
出席人数	
振込先	
会の様子や写真	

発行者
埼玉大学けやき会
(埼玉大学文学部文学科・人文科、教養学部、文化科学研究科 同窓会)
会長 榎木誠
編集 関根増男
埼玉大学けやき会事務局
〒338-8570
さいたま市桜区下大久保255
埼玉大学教養学部内
メールアドレスは
info@keyakikai.net
埼玉大学同窓会事務局
dousou@mail.saitama-u.ac.jp
電話: 048-858-9218

う人手が足りません。時間に余裕がある方はぜひ役員に応募してください。
2014年版新名簿
1冊3800円です。購入希望者は事務局へ。
不審な問い合わせ
名前や身分や理由などがはつきりしない問い合わせには、答えないように注意しましょう。